

男性相談とセクシュアリティ

坊隆史 松本健輔

男性援助の実践者2名による本連載は、男性援助に関する内容という以外は一切の縛りはなく、交互に自由気ままに書き綴られて6回目を迎えることになった。前回は松本がセックスレスについて論じた。自身の援助実践から性とパートナーシップに関するリアルな問題提起がなされていたように感じる。そんな前回に刺激を受け、今回は男性相談（男性の、男性における、男性のための相談窓口）の現場からみえてくる男性の性、とくにセクシュアリティについて考えることにする。

1、男性相談と性

「『おちんちんが小さい』と言われるのだけれども、本当に小さいのでしょうか？」

これは本連載第1回で登場した相談例である。こうした主訴の相談は男性相談員が男性の悩みに応じる男性相談の現場では比較的多い。また性器に関するダイレクトな性の相談だけでなく、男性性に悩む男性からの「性」に関する相談も多い。詳細は後の説明でおわかりになるだろうが、ジェンダーおよびセクシュアリティの問題は、男性—女性、正常—異常、適応—逸脱などの二項軸では簡単に表現できない。言葉で表現できない「あいだ」で揺れている人も多く、明確な答えもない。それゆえ自分の性のあり方を模索することを援助することが「性」の援助につながる。

社会的な性を意味するジェンダー（Gender）に関する問題は、これまでジェンダー論にて男性役割葛藤、ワークライフバランスなどをキーワードとして取り上げられてきた。男性相談の場においても、ジェンダーに関する相談は生きにくさやキャリアなど従来のカウンセリングモードを応用させることで耳を傾けることができる内容が多い。

ところが同じ性であってもセクシュアリティになると事情が変わってくる。セクシュアリティ (Sexuality) とは、「人々があるモノ・コトを性的と感じている事態そのもの」を指している語である。生物学的な性別、性自認、性的指向、性的嗜好、生殖などの様々な概念が含まれている。つまり「その人の性のありようをトータルに指す言葉 (メンズセンター、2000)」である。

男性性に関する相談場面では、こうしたセクシュアリティの視点が欠かせない。例えば、男性の役割葛藤に物心ついた時より同性に性的関心が向いていることをカミングアウトできないでいる男性、性愛の方向が社会的に逸脱していることを自覚してはいるものの修正することができずに悩んでいる男性たちが実際にいる。このような男性たちが抱えている主訴に耳を傾けるには、男性のもつセクシュアリティにセンシティブにならなければ傾聴できない。ところが、性に関する話題そのものが、現代の日本ではタブーである傾向はまだ根強い。だからこそ、相談の主訴となっているのであり、恐る恐る勇気を出して相談をしているのである。男性援助に携わる援助者はこうした現実とセクシュアリティを理解しておくことが必要であろう。

2、セクシュアリティに関する用語の整理

そもそも、セクシュアリティに関する言葉をどれほどご存知だろうか？ 知っているようで知らない言葉も多いのではないだろうか。性に関する話題を主訴とした男性相談および男性援助を考察する上で、セクシュアリティに関する用語をある程度知っておくことはクライアントを理解するための助けとなる。ところが非常に多様で筆者自身も困惑することがあった。今でも混乱することがある。ここで筆者自身が用語を整理するため、そして読者にも性に関する用語の多様性と基礎知識を知ってもらうためにちょっとしたクイズを用意した。知識の整理の意味合いも兼ねてお付き合い頂ければ幸いである。解釈は他にもあるが、「男の子の性の本」(メンズセンター、2000)の表現を中心に引用している。解説は唯一のものでないことはご了承頂きたい。



セクシュアリティ用語の整理クイズ

言葉とその意味を一致させてください

- 1、アセクシュアル
 - 2、インターセックス
 - 3、クィア
 - 4、トランスジェンダー
 - 5、トランスセクシュアル
 - 6、トランスベスタイト
 - 7、バイセクシュアル
 - 8、ヘテロセクシュアル
- A こころと身体の性に違和感をもち、性別を変更したり、変更したいと感じている人
 - B 異性を恋愛や性愛の対象とする性的指向を持つ人
 - C 解剖学的に男女両方の特徴を併せもつ人。また、身体の性別が典型的な男女のどちらかではない状態で生まれた人
 - D 性的欲求をあまり感じない人
 - E こころと身体の性別に何らかの違和感、つまり性別違和感をもっている人
 - F セクシュアルマイノリティが自分たち自身を指す肯定的な語
 - G 性指向が異性・同性のいずれにも向く人

1	2	3	4	5	6	7	8

いかがであったでしょうか。日頃セクシュアリティに関心をもっておられる方にとっては簡単だったかもしれないが、さほど意識してこなかった方は初めて目にする言葉もあったのではないだろうか。以下、簡単ではあるが正答と補足の解説をしていきたい。

1、アセクシュアル (asexual)

正答は「D」である。アセクシュアルとは性的関心を持たない人のことを指す。性的関心をもたないと一言でいっても指向は多様である。

2、インターセックス (intersex : IS)

正答は「C」である。解剖学的に男女両方の特徴を併せもつ人、あるいは身体の性別が典型的な男女のどちらかではない状態で生まれた人のことを指す。半陰陽、ふたなりともいう。後に紹介するトランスセクシュアルとは別のセクシュアリティである。

男性または女性のいずれかで育てられ、第二次性徴を迎える思春期でインターセックスだと判明するケースが多い。その際、ジェンダーアイデンティティの変更や決定を求められ、本人は大きな苦悩に直面する。周囲の大人は驚き、彼らの主観で性の決定を求めることがあるが、本人にとっては一生を左右する大きな決断となる。こうしたクwestioning (questioning : 性の決定に迷っている人) に対して保護者や医師などの意見を参考にすることがあるが、あくまで参考であり、本人の自己決定が最重要である。男性相談はセクシュアリティに関係した相談も多く、こうした悩みに対しても適切な知識を有し、真摯に傾聴していく姿勢が求められる。

3、クィア (queer)

正答は「F」である。セクシュアルマイノリティが自分自身を肯定的に表現する語のことである。もともとは相手を中傷する言葉として用いられたが、自身が誇りをもって用いるようになった。中にはセクシュアルマイノリティのコミュニティ全体を包括し結束を高めるという意味で自ら名乗ることを好む人もいる (Huegel, 2003)。

筆者自身も男性のための電話相談において「私、クィアなのですが…」という相談を受けたことがある。初めに相談を受けた当時、意味を知らなかった筆者は、クライアントに対して意味を尋ね、現在の日本でも当事者同士では頻繁

に用いられていることを教わった。クライアントから「(セクシュアルマイノリティに対して) なかなか理解がないのが辛い。でもこうして興味をもって聞いてくれただけでもありがたい」と言ってもらえたことが印象深い事例であった。

4、トランスジェンダー (transgender : T G)

正答は「E」である。こころと身体の性別に何らかの性別違和感をもつ人のことをトランスジェンダーという。自分の性自認や性表現が異なっている人の総称で、(あらゆる段階の) トランスセクシュアル、トランスベスタイト、インターセックスなど、多様な状態の人が含まれる (Huegel, 2003)。性的指向は様々で異性愛 (ストレート) もいれば同性愛の人もある。

5、トランスセクシュアル (transsexual : T S)

正答は「A」である。こころと身体の性別に何らかの性別違和感をもち、それを解消するためにホルモン治療や性転換手術をして性別を変更する人、あるいはしたいと望んでいる人をいう。当事者にとっては性別を変更という言い方は誤りで、本当の性を取り戻すことである。トランスセクシュアルの人は全てトランスジェンダーであるが、トランスジェンダーの人は全てがトランスセクシュアルとは限らない。

6、トランスベスタイト (transvestite : T V)

正答は「H」である。こころと身体の性は一致しているが、外見やファッションを異性のものにしたい人たちのことである。クロス・ドレッサーともいう。メンズセンター (2000) は、女装をする男性のトランスベスタイトの多くは、異性愛者であると述べているが、筆者の実感もそうである。トランスベスタイトであることをカミングアウトしている知人もがいるが、その知人は異性と結婚をしているし、パートナーに対して性的な関心もあるという。

統計こそないものの、潜在的なトランスベスタイトはずいぶん多いように見受けられる。筆者が受ける相談ではインターセックスやトランスセクシュアルよりも頻度が多い。大概はトランスベスタイトという概念を知らないことが多く、逸脱した性癖であると思い、「私は変態なのでしょうか？」と相談してくる。その際、トランスベスタイトという言葉を紹介すると、「自分はおかしくなかったんだ」と安心して自分のセクシュアリティを受け入れられることが多い。さらに適応的な男性当事者になると、オフィシャルな場面では男性の服装をして

いるが、下着やハンカチに関しては女性用を使用するといったように、人目につきにくい部分で異性の服装を維持することでメンタル面でのバランスを保っている人もいる。

7、バイセクシュアル (bisexual)

正答は「G」である。性指向が異性、同性いずれにも向く人、あるいは相手の性別にこだわらない人のことである。両性愛者ともいう。バイセクシュアルに対して、同性を恋愛や性愛の対象とする性的指向を持つ人のことをホモセクシュアル (homosexual) という。

筆者はバイセクシュアルの当事者から相談を受けることもあるが、異性に対しても感情的、性的な関心をもつことができるため、普通に婚姻生活を送っていることも多い。ただし、異性より同性への興味が強い場合、異性のパートナーに対する罪悪感をもってしまったり、より興味が惹きつけられる同性パートナーへの欲求について相談してくることもある。

8、ヘテロセクシュアル (heterosexual)

正答は「B」である。異性に対して性的指向をもつ人である。多くの人はヘテロセクシュアルである。セクシュアルマイノリティとはヘテロセクシュアル以外の総称と理解して頂ければよい。また性同一性障害などのように自分と他者の間で同性の捉え方が異なる場合、身体的に同性であっても異性とみなすことが多い。

補足として、クイズには含めなかったがセクシャルマイノリティの表現の変遷についても紹介しておきたい。かつてセクシュアリティについては、異性愛すなわちゲイ (gay) とレズビアン (lesbian) のみが考慮され「G & L」と呼ばれてきた。次第にバイセクシャルのBが加わり、G L BまたはL G Bと呼ばれるようになった。さらにはトランスジェンダー (T) とクエスチョニング (Q) が加わり L G B T Qと呼ばれるようになってきている (Huegel, 2003)。アメリカにおいてはL G B T Qという表現が相当浸透しているだけでなく、日本でもセクシュアリティに関する書籍では少しずつ用いられてきつつあるようである。

さらにジェンダーに関する基本的な用語を次頁に記しておく。ジェンダーについては、知識や理解が普及してきているように思うがまだまだ誤解も多いように思われる。理解の補足にしてほしい。

- ジェンダー・プレゼンテーション（体や外見によって表現される性別）
- ジェンダー・ロール（社会的な性別役割）
- ジェンダー・アイデンティティ（性別の自認）

3、男性相談と性

筆者は「男性相談」と銘打った相談で男性たちから様々な相談を受けている。その方法は大きく面接相談、電話相談と二種類である。性の相談に関していえば、ジェンダー、セクシュアリティともに匿名性の高い電話相談からの相談が際立って多い。性を語るには抵抗があるし勇気がいるからである。

性、とくにセクシュアリティを語ることは難しい。例えば単にヘテロセクシュアル、ホモセクシュアルといっても単純に二分できるものではない。右の表をご覧ください。セクシュアリティに関する古典のキンゼイ・レポートからの引用であるが、異性愛、

表 性的嗜好のスケール(Kinsey,1948)

0	完全な異性愛者
1	主に異性愛、まれに同性愛
2	主に異性愛、ときどき同性愛
3	異性愛と同性愛が同等
4	主に同性愛、ときどき異性愛
5	主に同性愛、まれに異性愛
6	完全な同性愛者

同性愛間は一連続線上のスペクトラムとしてまとめられている。私たちは異性愛、同性愛といえば白/黒の二分法でまとめてしまう傾向がある。さらにはマイノリティ（同性愛）を例外的なものとして逸脱しているものとみなしてしまう傾向すらある。しかし、実際は連続しているスペクトラムとして理解しておく方が望ましい。

とくに男性相談の援助場面では性を扱うことが多くなるのでなおさらである。例えば同性愛で自分が異常なのではと悩んでいる男性から相談があった場合、援助者がセクシュアリティの多様さや複雑さを理解しておけば、「好きになった人は全員男性ですか？」とか「今回好きになってしまった人がたまたま男性なだけですか？ もしそうであれば他の人にもあることである。そのためおかしいことではないですよ」と伝えることができる。冒頭でも述べたように男性—女性、正常—異常、適応—逸脱の二項軸ではなく、“あいだ”を取り扱うことができるように心がけるは、ジェンダーやセクシュアリティといった男性性の相談援助を行っていく上で重要であろう。

ここまで男性相談と性について述べるための準備段階として、整理を目的としてセクシュアリティに関する語句の一部を概観してきた。これだけで男性相談における性、とくに男性セクシュアリティについては大きなテーマであることがおわかり頂けたのではないだろうか。1回で述べてしまうのはもったいない壮大かつ深いテーマであるため、今回はここまでにしておこうと思う。実際の相談場面からみえてくる男性がここに抱えるテーマについては次回まで温めておくことにする。しばしお待ち頂きたい。

(文責：坊 隆史)

文献

- メンズセンター（編著） 2000 男の子の性の本—さまざまなセクシュアリティ— 解放出版社
- 上田勢子（訳） 2011 LGBTQ ってなに？—セクシュアリティ・マイノリティのためのハンドブック— 明石書店 （Kelly Huegel 2003 GLBTQ: The Survival Guide for Queer & Questioning Teens Free Sprit Publishing）